

報告者について

氏名(所属専攻・職名)	中牧 弘允 (比較文化学専攻・教授)
略歴	<p>学歴</p> <p>東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。文学博士。</p> <p>職歴</p> <p>日本学術振興会奨励研究員を経て、1977年より民博</p>
専門分野	<p>宗教人類学、経営人類学</p> <p>1) 日本宗教と日系宗教の人類学的研究</p> <p>2) 会社文化の人類学的研究</p> <p>3) ブラジルの民衆文化</p> <p>4) アマゾンの先住民文化</p> <p>5) カレンダーと文化比較</p>
現在の研究テーマ	<p>カレンダー文化の研究</p> <p>会社と宗教の文化人類学的研究</p>

報告内容について

題名	日本の中のニッケイ、世界の中のニッケイ
概要	<p>日本の中における日系人の環流現象は1990年代に加速し、リーマンショックで減速し、東日本大震災でブレーキがかかった。他方、「新世界」への日本人の海外移住は1885年からのハワイ官約移民を起点に北米、中南米へと展開し、第二次大戦前後の中断を経て、1950年代から60年代前半にかけて活性化した。</p> <p>この二つの現象をどう統合的にとらえるか。経済学は経済成長や好不況を指標とするだろうし、社会学は社会変動や人口移動をメルクマールにえらぶだろう。人類学はエスニシティーを基軸に文化変容をはかろうとするにちがいない。</p> <p>これに対し文明学は、参加を強調し、文明の創造的営為への貢献を重視する。それは梅棹忠夫の「われら日本人、新世界に参加す」という発想から生じ、日本ブラジル移民史料館（サンパウロ）とJICA横浜海外移住資料館の展示として具体化した。その軌跡をたどりながら、表題の検討をおこなう予定である。</p>